

柴田 博名古屋大学名誉教授と豊橋市自然史博物館

松岡敬二*

Emeritus Professor of Nagoya University, Hiroshi Shibata and Toyohashi Museum of Natural History

Keiji Matsuoka*

はじめに

柴田 博名古屋大学名誉教授は、2005年4月1日より糸魚川淳二館長の後任として豊橋市自然史博物館に着任され、2010年3月31日まで館長を勤められた。2009年8月4日、豊橋市立小中学校の教員対象に開催された研修会の講演後に、体調を崩され、豊橋医療センターへ緊急入院され、心筋梗塞の治療を受けられた。退院後、心筋梗塞の治療中に見つかった大腸がんの手術のために、藤田保健衛生大学病院に入院された。その後、自宅から通院による抗がん治療を受けられていたが、2010年5月4日に逝去された。享年73歳(1937-2010)であった。

柴田前館長が在任期間中の5年間に関与された主要な博物館活動については時系列に沿って『柴田博先生の業績と思い出』のなかで紹介した(松岡, 2010a)。同書には館長の研究業績も掲載されている。本報告では、前出の報告で未公表であった内容や写真について、教育普及活動、調査研究活動、展示室改装に分けて加筆整理した。なお、報告の内容については、豊橋市自然史博物館職員の協力と数々の情報の提供を頂いた。

教育普及活動

柴田前館長が就任された2005年には、愛・地球博(愛知万博)が開催された。会期中(3月25日～9月25日)には、豊橋市とフレンドシップ国であったアメリカ、ベネズエラ、ホンジュラス、リトアニア、ドイツ、中



第1図. ビエリチカ岩塩の展示とポーランド共和国大使。

国のパピリオン館長、大使等の来館があった。リトアニアの大使が訪問された時には、柴田前館長が展示室を案内され、9月21日には虫入りコハクの寄贈を受けた。さらに翌日にはヴィルニウス大学のポーデナス(Sigitas Podenas)教授の「バルチック・アンバー(Baltic Amber)」の講演会が開催された。愛・地球博の閉会后、11月9日にはポーランドのパピリオンに展示されていたビエリチカ岩塩の寄贈にあたり、当館での寄贈式典へ列席され、寄贈資料の展示についても指導された(第1図)。

7月28日には、こども環境サミット2005のワークショップ・フィールドトリップ「自然史博物館で学ぶ生物の進化と愛知県の自然」が開催され、自然史博物館に秋篠宮文仁親王殿下・同妃殿下、秋篠宮家真子内親王殿下、同佳子内親王殿下が御来館され、時間・対応の厳しい制限があるなかで先頭にたって案内され

* 豊橋市自然史博物館. Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi 441-3147, Japan.

原稿受付 2010年12月10日. Manuscript received Dec. 10, 2010.

原稿受理 2010年12月28日. Manuscript accepted Dec. 28, 2010.

キーワード: 柴田 博, 名古屋大学名誉教授, 館長, 豊橋市自然史博物館.

Key words : Hiroshi Shibata, Emeritus Professor of Nagoya University, Director, Toyohashi Museum of Natural History.



第2図・南通博物苑新館開館記念式典（2005.9.24）。



第4図・学習教室「家族で行く化石採集」での瑞浪市化石博物館見学（2006.11.23）。



第3図・自然史講座「地球の割れ目をのぞくーアフリカ大地溝帯の自然」（2006.6.18）。



第5図・館長とおしゃべりタイム（2007.2.11）。

た。

9月23日～26日には、豊橋市と友好提携を結んでいる南通市の招聘により、中国博物館事業百年と南通博物苑新館開館記念式典及び「国際高水準博物館館長フォーラム」へ参加のため（第2図）、原光枝副館長兼事務長（当時）と共に出張された。

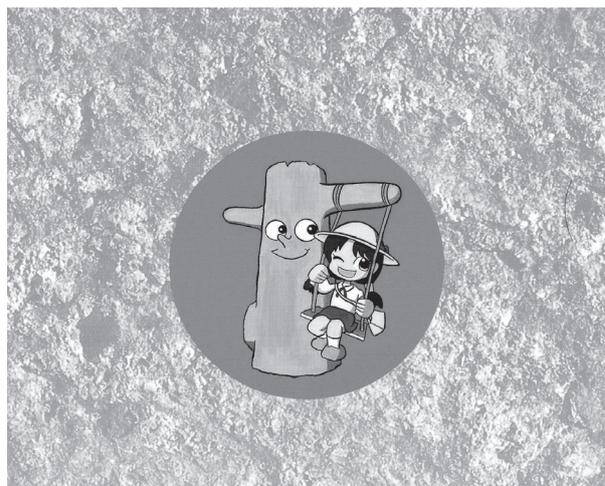
自然科学の基礎を学ぶ自然史講座では、外部講師や当館学芸員の紹介を行うほか、平成17年度から平成20年度まで年1回館長自らも講師を勤められた。各年の演題は「泳ぐ貝の化石みつけた」（2005年5月22日）、「地球の割れ目をのぞくーアフリカ大地溝帯の自然」（2006年6月18日）（第3図）、「神秘の国エチオピアー花と人」（2007年7月1日）、「神秘の国エチオピアーめずらしい野生動物をみる」（2008年8月24日）であった。平成17年度の「泳ぐ貝の化石」は、柴田前館長のライフワークの研究成果に基づくものである。その浮遊性腹足類の研究は昭和50年代初めから開始

され（Shibata, 1977）、全国の新生界へと広がっている。1980年には京都大学霊長類研究所の調査団としてエチオピアの調査に参加され、定年退職後も毎年のように訪問されていた。平成18年度からのエチオピアの講座は、館長自らが現地でも撮影された豊富な写真に基づいて行われた。

野外での自然観察・岩石・化石採集などを行う学習教室のうち、岐阜県瑞浪市で開催している「家族で行く化石採集」は、毎年抽選倍率の高い人気行事である。瑞浪市は、柴田前館長・糸魚川元館長の主要研究テーマである瀬戸内中新統の古生物地理学的重要な場所でもある（柴田・糸魚川, 1980, 1989; 糸魚川・柴田, 1992）。瑞浪市化石博物館に到着すると、館内の見学とへそ山の地層観察後、土岐川河床へ移動し化石採集を行っている。参加者に対して前館長自ら現地で化石の採集の方法や名前について分かりやすく指導された（第4図）。



第6図. 高円宮憲仁親王妃殿下を特別企画展「恐竜と生命の大進化-中国雲南5億年の旅-」御案内 (2006.9.6).



第8図. 「とよはし高師小僧フェスタ」報告書の裏表紙.



第7図. シンポジウム「とよはし高師小僧フェスタ」の開会挨拶.



第9図. 特別企画展「ホネホネ大行進-骨学のススメ」のキャラクター名表彰式 (2007.7.13).

「館長とおしゃべりタイム」では、平成17年度より自然史スクエアにおいて、来館者サービスを高めるための新しい試みとして自作の紙芝居を開始された。服装は子どもたちに親しみをもって迎えられるようにとんがり帽子を着用された(第5図)。平成17年度は「恐竜アナトのぼうけん」、平成18年度には「はだかのチンパンほくらの祖先」が加わった。この実践を通して、絵本『恐竜アナトのぼうけん』、『恐竜エドモンのぼうけん』、『はだかのチンパンほくらの祖先・1, 2』(原案・監修:柴田博, 絵:柴田恵)が出版された。

豊橋市制100周年にあたる平成18年には、数々の記念事業が実施された。自然史博物館では特別企画展「恐竜と生命の大進化-中国雲南5億年の旅-」、「ユカギルマンモスミュージアム」、「とよはし高師小僧フェスタ」を開催した。特別企画展では、展示方法についての助言や中国からの代表団の対応に勤められ

た。さらに、会期中の9月6日には高円宮憲仁親王妃久子殿下がご来館され、展示物の御案内をされた(第6図)。

「とよはし高師小僧フェスタ」では、シンポジウム「高師小僧ってなあに?」での開催の挨拶(第7図)、「高師小僧コンテスト」の入賞者の表彰をされた。「とよはし高師小僧フェスタ」を少しでも親しみやすい形にしたいとの思いから、高師小僧と少女の構成によるキャラクターの制作も提案された。翌年発行された同報告書は、裏表紙にこのキャラクターが掲載され(第8図)、「はじめに」の執筆もされた(豊橋市自然史博物館編, 2007)。キャラクターの導入は、第22回特別企画展「ホネホネ大行進-骨学のススメ」(2007年)の「キャプテン・ボーン」へと展開していった。キャラクター名は、一般から公募し、入賞者は市長及び前館長から表彰された(第9図)。また、次年度の日伯

交流年事業・第23回特別企画展「シーラカンスーパーラジルの化石と大陸移動の証人たち」(2008年)では、古代魚缶バッジ作りでの古代魚のイラストを制作された。

博物館の出版活動では、標本作りや豊橋の自然を深く学べる手引書として自然史博物館ガイドブックを発行している。ガイドブック⑤『標本をつくろう 岩石・化石編』(2006年)、同⑥『豊川の自然』(2007年)では、「はじめに」を執筆された。

一般来館者用の『豊橋市自然史博物館 展示案内』は開館当初に発行され、1995年には新しい『豊橋市自然史博物館 総合案内』を作成した。しかし子供向けの解説書はなく、柴田前館長からの提案で平成20年度から準備が進められ、2003年6月30日に『はくぶつかんたんけん(豊橋市自然史博物館展示案内)』として発行された。

平成20年度は、開館20周年記念シンポジウム「復元-恐竜のすがたにせまる-」が7月13日に開催され、総合討論でコーディネーターを勤められ、合わせて行われた野外恐竜ランドのプラキオサウルスの色塗り募集の最優秀賞者に表彰状を授与された(豊橋市自然史博物館編, 2008)。また、同報告書(2008)では巻頭言「発刊にあたって」を執筆された。

平成17年度から開始された自由研究展においては、市内の小中学生の入賞者に対して表彰状の授与及び入賞作品の研究内容についての総評をされた(第10図)。

平成9年度より活動を始めている自然史博物館ボランティアは、平成22年度43人が登録されている。ボランティア自主研修には、アドバイザーとして参加された。平成17年度の研修では神谷敏郎著『骨と骨組みのはなし』、平成18年度ではドゥーガル・ディクソン著『生命と地球の歴史アトラスⅡ デボン紀から白亜紀』をテキストに使われた。ボランティアの自主研修は、現在の中生代展示室のリサーチテーブルの解説、常設展示室のガイドツアーや特別企画展での解説、教育普及アイテムの制作などの活動に引き継がれている。

調査研究活動

豊橋市自然史博物館研究報告は、学芸員などの調査研究の成果をまとめた論文を中心に構成されている。柴田館長は研究報告第16号～第19号の編集委員として、学芸員を育てる立場で丁寧に原稿を査読された。さらに、学芸員にはこの地域の地質や打ち上げ貝類の



第10図. 自由研究展表彰式(2008.10.11)。

研究を熱望されていた。中でも、大学時代から研究されていた瀬戸内中新統に関する内容は急ぐように指導された。特に、フィッション・トラック年代測定で古い年代をもつ粒子と外来結晶を排除する外部ディテクター法による論文(松岡・森, 2006)や、長篠層産の貝類化石の記載論文(Shibata and Ichihara, 2006)は、設楽層群の年代が古第三紀とする報告(林・興水, 1992)について再度検討すべきであるとの指示により、執筆されたものである。その他にも館長の共著論文もある(Shibata et al., 2006; Shibata and Ujihara, 2008)。

化石研究会でのシンポジウムのポストプリント編集に当たっては、治療中にもかかわらず、投稿された松岡および吉川の前稿を査読され、懇切丁寧に査読され、指摘事項が原稿へ書き込まれ、返信されてきた。この原稿は、化石研究会誌第43巻第1号にそれぞれ掲載された(松岡, 2010b; 吉川, 2010)。

自然史博物館の展示室改装

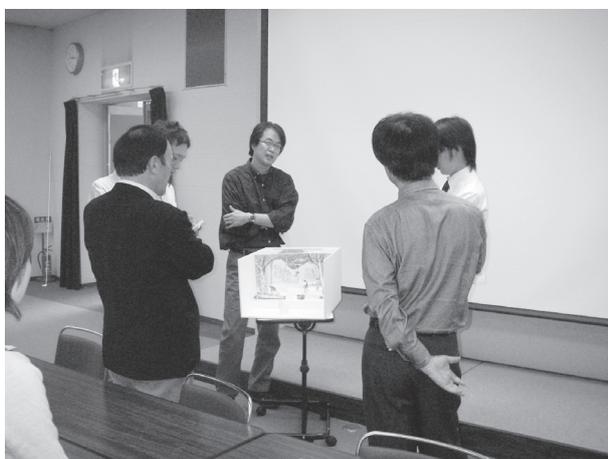
豊橋市第4次総合計画(2001～2010)における自然史博物館の整備充実事業は、平成13年度から始まり、2004年4月28日に古生代展示室がリニューアルオープンした。柴田前館長が就任された平成17年度に、中生代展示室の増築部分(約249㎡)の実設計を行い、平成18年度に工事に入った。豊橋市自然史博物館協議会では展示物改装などの取り組みを行った施設の視察を行い、展示物改装に生かすための調査に同行された(第11図)。平成19年度は、平成16年度の中生代展示室の実設計に基づき2か年継続の展示物製作に着手した。展示物製作については、古生代展示室からの基本コンセプトを継承され、打ち合わせ会議に参加された(第12図)。さらに、来館者の見学動線につい



第11図. 豊橋市自然史博物館協議会での名古屋海洋博物館視察 (2005.2.24).



第14図. 中生代展示室内覧会 (2008.4.23).



第12図. 中生代展示室展示物製作打ち合わせ (2007.10.24).



第15図. 郷土の展示室 Q&A 待ち受け画面.



第13図. 古生代展示室と中生代展示室入口サイン.

では、古生代展示室から時系列に沿う順路と、各展示室に自由に展示室が見学できる順路が選択できるように、展示室入口壁面に新たなサインを設置するように指示された(第13図)。

2008年4月26日に竣工した中生代展示室の記念式典は、市長、市議会議員、国会議員を迎え、挙行され、柴田前館長により新展示室の展示物の内容が紹介され

た。それに先行して4月23日には、豊橋市議会議員、報道関係者の内覧会を開催し、展示室を案内された(第14図)。

郷土の自然展示室の「Q&A コーナー」は2007年11月30日に内容を更新した。柴田前館長は「日本一長い断層(だんそう)は?」と「豊川がはじまるのは?」の問題で登場されている。全体の待ち受け画面では、前館長を中央にスタッフ全員のイラスト画像が迎えてくれている(第15図)。

最後になりましたが、柴田 博前館長にご指導いただいた内容と御遺志を引き継ぎ、博物館が発展するように努力していきたいと考えています。

引用文献

- 林 唯一・輿水達司, 1992. 愛知県北東部に分布する設楽層群のフィッシュン・トラック年代と最下部長篠累層産始新世貝化石. 地質雑, 98 (9): 901-904.
- 糸魚川淳二・柴田 博, 1992. 瀬戸内区の中新世古地理 (改訂版). 瑞浪市化石博研報, (19): 1-12.
- 松岡敬二, 2010a. 豊橋市自然史博物館での活動. 柴田博先生を

- 偲ぶ会（編），柴田博先生の業績と思い出，名古屋，7-10.
- 松岡敬二，2010b. 豊橋市自然史博物館にみる無脊椎動物化石の復元. 化石研究会会誌，**43**（1）：2-9.
- 松岡敬二・森 勇一，2006. 愛知県新城市の北設亜層群のフィッシュン・トラック年代. 豊橋市自然史博研報，（16）：49-51.
- Shibata, H., 1977. Planktonic gastropods from the Miocene First Setouchi Series in the Setouchi Geologic Province, Southwest Japan. *Bull. Mizunami Fossil Mus.*, (4): 31-44.
- Shibata, H. and Ichihara, T., 2006. Miocene mollusks from the Nagashino Formation of the Shitara Group in Shinshiro City, Aichi Prefecture, central Japan. *Sci. Rep. Toyohashi Mus. Nat. Hist.*, (16): 1-14.
- 柴田 博・糸魚川淳二，1980. 瀬戸内区の中新世古地理. 瑞浪市化石博研報，（6）：1-49.
- 柴田 博・糸魚川淳二，1989. 瀬戸内区と古瀬戸内海. アーバンクボタ，（28）：2-9.
- Shibata, H., Ujihara, A. and Ichihara, T., 2006. Pelagic mollusks from the Middle Pleistocene Takamatsu Silty Sandstone of the Atsumi Peninsula, central Japan. *Sci. Rep. Toyohashi Mus. Nat. Hist.*, (16): 15-30.
- Shibata, H. and Ujihara, A., 2008. Pliocene heteropods (Mollusca: Gastropoda) from the Miyagi-shima, Okinawa, Japan. *Sci. Rep. Toyohashi Mus. Nat. Hist.*, (18): 1-9.
- 豊橋市自然史博物館編，2007. とよはし高師小僧フェスタ報告書. 豊橋市自然史博物館，豊橋. 53p.
- 豊橋市自然史博物館編，2008. 「復元－恐竜のすがたにせまる－」報告書. 豊橋市自然史博物館，豊橋. 40p.
- 吉川博章，2010. 古植物の復元：部分から全体像をイメージする展示. 化石研究会会誌，**43**（1）：10-14.